

司式:大塚 明子
奏楽:吉田千鶴子

前奏:「ああ神よ、天より見そなわし」(J.N. ハンプ)

招詞:主に望をおく人は新たな力を得 鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。(イザ40:31)

讃美歌 11「感謝にみちて」

交読詩編 119:1-8 (アレフ)

- 01 いかに幸いなことでしょう/まったき道を踏み、主の律法に歩む人は。
- 02 いかに幸いなことでしょう/主の定めを守り/心を尽くしてそれを求め求める人は。
- 03 彼らは決して不正を行わず/主の道歩みます。
- 04 あなたは仰せになりました/あなたの命令を固く守るように、と。
- 05 わたしの道が確かなことを願います/あなたの掟を守るために。
- 06 そうなれば、あなたのどの戒めに照らしても/恥じ入ることがないでしょう。
- 07 あなたの正しい裁きを学び/まっすぐな心であなたに感謝します。
- 08 あなたの掟を守ります。どうか、お見捨てにならないでください。

朗読聖書①エゼキエル書 18:30-32

- 30 「…それゆえ、イスラエルの家よ。わたしはお前たちひとりひとりをその道に従って裁く、と主なる神は言われる。悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。罪がお前たちをつまずかせないようにせよ。
- 31 お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。
- 32 わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」と主なる神は言われる。

朗読聖書②マタイによる福音書 5:21-26

◆腹を立ててはならない

- 21 「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。
- 22 しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。
- 23 だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、
- 24 その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。
- 25 あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。
- 26 はっきり言うておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

祈祷

私たちの救い主、主イエス・キリストの父なる神さま、聖名を賛美申し上げます。例年がない暑さの続く夏を過ごし、残暑厳しい 9 月第 3 週、聖霊降臨節第 18 主日の朝、健康を守られて教会に集い、またライブ配信を通して共に礼拝をお献げする恵みに与ることが許されましたことを心より感謝申し上げます。

過ぐる週を顧みますと、私たちは日々の忙しさの中で心を騒がせ、不安を覚え、また不平、不満を吐くことが多く、自らの思いに囚われて、心からの祈りを献げて神さまの声を聴くこと少ない者でございました。しかし神さま、あなたはそのような私たちの愚かさ、弱さ、罪深さを憐み、今朝も教会へと招いてくださいます。と、「立ち返って生きよ!」と、力強く私たちに呼びかけてくださっています。私たちの頑なな心の扉を叩いて、溢れるばかりの恵みの御言葉をお与えください。

日本では、年の始めから地震や集中豪雨、また台風など自然災害が多発しております。気候変動に無関心でいられないほどに世界各地から洪水や山火事、気温の異常な上昇による自然環境の変化や犠牲者の多く出ているというニュースなどが報道されております。日常生活を奪われて多くの困難や悲しみの中にある被災者の方々の上に、神さまの憐れみと慰めが豊かに注がれますようにと祈ります。また、次の世代に住みやすい環境を残すために私たちはどの様な生活をしたらよいのでしょうか? 自らの問題であることを自覚して真剣に考えて一つひとつの行いを慎重に選択していくことが出来る知恵を与えてください。

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故から 13 年半が経ちました。しかし今、原子炉内に残されている放射性物質の塊であるデブリの処理に気の遠くなるような年月が掛ることを知らされております。私たちは豊かな生活を維持しようとの思いから人間の知恵では制御が難しい物質を利用している傲慢に気づかせてください。原発事故によってそれまでの生活が壊されて汚染されてしまった故郷に未だ戻ることが出来ず、長期間にわたって不安定な生活を強いられている方々の存在を忘れることなく、一日も早く平穏な日常が訪れますよう困難な中にある人々のために祈りつつ、私たちに出来ることをお示しください。

今年は信濃町教会創立 100 周年を迎えております。6 月 2 日の記念礼拝と記念会をはじめ、計画しておりました講演会なども全ての教会員の皆さまのご協力の下、夏前に無事終えることが出来ました。記念誌をはじめ、信濃町教会と私、教会学校記念誌、記念講演集など、様々な出版物の準備が現在行われております。出版の暁には信濃町教会 100 年の歩みを振り返り、教会員が共に多くを学ぶことが出来るものとなりますよう、夫々の責任に当たって作業を進めておられている方々のお働きをあなたが祝してください。そして健康を守り、神さまのお支えを切に祈ります。また今年の 100 周年記念行事が過去から学びつつも力弱い小さな群れがこれからの 100 年に向かって歩み続けるための大きな力となりますよう聖霊の豊かなお導きを祈ります。

本日の礼拝を覚えながらも病のために入院を余儀なくされている方々、あるいは高齢のために礼拝に与ることの出来ない兄弟姉妹の上に、神さまの癒しと慰めを豊かにお与えください。またご家族の介護や仕事の疲れによって教会に今集うことが出来ない兄弟姉妹を覚えませう。どうぞ、それらの疲れを癒し、そして励まし、あなたが傍らにいて支えてくださいますように。

今日の説教者を感謝致します。佃雅之先生を通して、御言葉が存分に語られますように聖霊を豊かに注いでください。御言葉の説き明かしを受け留める私たちが、御言葉に励まされ、聖霊に満たされて、この週も夫々に与えられた場に遣わされて、神さまの良き働き人となることが出来ますようにお導き下さい。

この祈り、主イエス・キリストの聖名によってお祈り致します。アーメン。

讚美歌 393「ころを一つに」

説教「腹を立ててはならない」

佃 雅之

司式者によって朗読されました福音書の箇所は『山上の説教』と呼ばれ、5章から7章まで続きますが、ここにキリストの弟子の生き方が書かれています。前回読みました5章17節で、キリストは、「わたくしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。(5:17)」と言われました。そして今日の個所で、旧約聖書に記された神の言葉を完成させるためにこう言われます。

「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。」

「殺すな」、「殺してはならない」というのは、旧約聖書の時代に、神がイスラエルの単に与えた律法の基礎となる10の掟、所謂「モーセの十戒」の第6番目にある言葉です。この戒めは、「命は誰のものであるか」ということを私たちに思い起こさせるものです。「殺してはならない、それはなぜか？」人間は神が造られたものであるからです。神は私たち人間を、神の姿に似せて造られました。それは姿形だけのことではありません。神ご自身が命の息を吹き入れてくださり、神ご自身の語りかけのパートナーとして造られたのです。ですから、軽んじたり、蔑んだり、いい加減に扱ったり、馬鹿にすることは赦されません。どのような人であっても人間は神の似姿なのですから一人ひとりの中に神が宿っている、神の意志がそこにある、人間は一人ひとりが神のパートナーとして生かされている者ですから殺してはいけません。

旧約聖書には、「人を打って死なせた者は必ず殺されなければならない(出21:12)」という規定があります。「人を打って死なせた」というのは、故意による殺人のことです。律法では故意に殺人を犯した者には死刑が言い渡されます。このことを踏まえてキリストが言われます。

22節 しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。

殺人という行為は、実はその行為に及ぶ前に、既に心の中で、「その人を殺している」ということです。心の中で、既に罪を犯している。キリストは殺人という行為そのものではなく、むしろその行為の発端となる心を指摘されます。私たちは、「殺してはならない」というこの戒めを、どれほど真剣に受け止めることが出来ているでしょうか。「そんなことは全く考えたことがないから自分には関係ない」、「私の身近な人には、知り合いには、人を殺すような悪人はいない」と決めつけてはいないでしょうか。しかし私たち人間は、時に神を忘れます。神への感謝を忘れた人間というのは、実に恐ろしい存在です。この世の現実を見るなら、「殺すな」という戒めを、人間は時に、いとも簡単に乗り越えてしまいます。実際に力を行使して、手をかけて、人の命を奪ってしまうまで距離は紙一重です。「殺そうとは思っていなかった」、「死んでしまうとは思わなかった」、ニュースなどでよく聞く言葉です。もし人を殺したら、自分のしたことの恐ろしさに震え慄くでしょう。しかし、「言葉で人を傷つけたくらいなら、たいしたことない」と思うのではないのでしょうか。「なに、あの人は、あんな人がいたら困る、あり得ない」、あるいはもっと積極的に、妬ん

だり、憎んだり、見下したりすることはあるのではないのでしょうか。

神から「殺すな」と命じられている私たちにキリストが言われます。「あなたの怒り、軽蔑、悪口は人殺しと変わらない。それは裁きに値する」と。キリストの律法理解においては、人を破壊するという点において軽蔑や悪口も殺すことと同じなのです。心の中で、「あんな人、いなければいい」と思った。それはもうその人を心の中で殺しているのと同じです。殺されないまでも、体を傷つけられないまでも、誰かから私の存在を否定される、それは耐え難いものです。誰もが少なからずそのような経験を持っていることでしょう。しかし、今度は自分が、「あんな人、いなければいい」と思ってしまう。「何であんな人がこの職場にいるのか、学校にいるのか、教会にいるのか」、そう思ったことはないでしょうか。

神は、あなたのその心を問題にされています。聖書には具体的に「ばか」、「愚か者」という言葉が書かれています。「ばか」(ῥοκκά)アラム語 ܒܝܫܝܢܐ [からつぽ] (織田小辞典)は「頭が空つぽ」という意味の言葉で、愚かなことをしている人に対して軽蔑を顕す言葉です。「愚か者」(μωρός)は「神を信じない、神無き者」という意味です。どちらも、その人を否定し存在の価値を認めない、その人を抹殺しようとする言葉です。神はその人の中にある兄弟の滅びを願う心を見ている。人間には、そのような権威も権限もありません。先ほども話しましたが、全ての人間は神によって造られました。「兄弟に腹を立てる」ということは、神の創造の業を否定する、神について無知な者が興す行為です。怒りは全ての人間が神によって造られたものであることを忘れさせてしまうからです。「お互いが神に似姿である」という私たちを結び合わせている深い繋がりを忘れさせるのです。つまり「腹を立てている時、その人の中には神がいない、神無き者の行いだ」と言うのであります。人の怒りは神の義を実現しません。プライドが傷つけられた、自分の思い通りに事が進まない、そのために腹を立てていることがほとんどであるからです。どのような人の命も、その命は神によって立てられ、神の御手の中に置かれているのです。生と死を支配されるのは神のみであります。

22節の冒頭にある「わたしは言っておく。(ἐγὼ λέγω ὑμῖν)」この言葉には、神の絶対的な権威が込められています。心の中にある対立、怒りを制御して罪を犯すことのない心を得るためには唯一つの道しかありません。それは、自分を捨ててキリストに生きることです。キリストによって、新しく創造されて、新しい命に生かされるものにならなければなりません。自己がゼロ、無となったとき、キリストが働いてくださいます。山上から語ってくださるキリストの言葉を聴いて自分が変わるといことです。御言葉を聴いて、御言葉に従って、自分を変えるのです。

具体的な教えとして「兄弟と仲直りしなさい」とキリストは言われます。「仲直り(διαλλάσσω)」という言葉は「和解する」とも訳すことが出来ます。ギリシャ語の元々の意味は「他のものと交換する」という意味です。或る牧師は、「自分を交換する」のだと語りました。「自分の心と相手の心を交換してみる」ということでしょうか。それとも、「自分の心とキリストの心を交換して頂く」ということかも知れません。相手を変えることは出来ない、しかし、キリストの言葉に従うなら、自分が変わることは出来るのです。

『山上の説教』と共に今朝は朗読された『エゼキエルの言葉』、「お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。」この言葉を聴きました。自分が変わるということは、聖霊の導くままに生きることです。それはつまり、今までとは全く別の人間に生まれ変わることを意味しています。

自分の正義ではなく、神の正義と恵みの業のために生きることです。「造り出せ」と言われているのですから、私たちに積極的な行動の変化を求める言葉でもあります。「新しい心と新しい霊を造り出し、主に立ち替わって生きるなら、兄弟と「仲直り」をすることが出来ます。

神は私たちが兄弟と「仲直り」するために、最も相応しい場所と時間を整えてくださいます。23 節にあります「あなたが祭壇に供え物を献げようとして」、この言葉は礼拝の時と場所を意味しています。兄弟と不仲なままで真の礼拝を献げることは出来ません。そこでキリストは「兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをしなさい」と言われます。ここでは「反感」と訳されていますが、元のギリシヤ語の言葉(σου τι κατὰ σοῦ = something against you)では「自分に反対する」という言葉です。同じ教会で、同じ信仰を与えられた兄弟姉妹であっても、自分と意見が同じでない人、反対する人もいるでしょう。しかし、ここでキリストは、「あなたが悪いのだから、相手の方が正しいのだから行動を興せ」とは言っていません。どちらが悪い、どちらが正しいが問題ではないからです。キリストが問題にされていることは、「あなたに反感を持っている兄弟が存在している」という事実です。もしその存在を思い出したなら、「あなたは礼拝を献げることも「仲直り」の方が優先だ」と言われるのです。

神が私たちに求められている礼拝というのは、真理と霊をもって献げられる礼拝です。神は私たちとの霊的な交わりを求めておられます。形がどれほど立派でも、神は決して喜ばれません。礼拝は生きておられる主との正に命の霊の交わりです。その礼拝において、神は私たちに問いかけてくださいます。「あなたは、今、兄弟を心の中で殺してはいないか。あなたは自分が神のようになって兄弟を審いてはいないか。あなたは自分が正しいと思って腹を立ててはいないか。そのようなあなたに「反感を持っている兄弟」がいるのに、あなたはそのまま神の愛に触れることが出来るのか。」礼拝において、この主の御声が聞こえたなら、「まず行って仲直りをする」のです。確かに、「仲直り」、「和解」というのは難しいことでしょう。関係が近ければ近いほど難しいかも知れません。「私が悪かった、言い過ぎた、傲慢であった、ごめんなさい」と、なかなか言えないのが私たちです。けれども、はっきりした態度を示さなければ状況を変えることは出来ません。お互いに欠点がある、お互い反省すべき点があると言い訳して問題の解決を先延ばしにしてはならないのです。ですからキリストは、「まず行って兄弟と仲直りをして来なさい」と言われます。自分から行って和解することをキリストは求められています。人を傷つけたままにしておく者は皆、終わりの日、神によって審かれ、牢に投げ込まれ、「最後のクアドラントを返すまで、決してそこから出ることはできない」こととなります。「クアドラント」は、ローマの最小貨幣です。「腹を立てて心の中で兄弟を殺す者への神の審きは、「最後のクアドラント」までも償わなければ、逃れることが出来ない厳しいものだ」と言うのです。それは現実的に言えば、「返済することが不可能である」ことを意味しています。

キリストは、ここではっきりと『最後の審き』について語っています。最後の日、私たちは主の審きの前に立たされるのです。そのことを私たちはわきまえていなければなりません。しかし、このキリストの言葉は私たちが滅ぼすためではなく、私たちが主に立ち返って、悔い改めて生きる者となるためです。神は、生きて働いておられます。しかし、「わたしは言うておく。」このキリストの言葉は私たちに、私たち自身の罪の深さを思い出させる言葉です。「神は罪ある私たちを愛されました。」これが、神が出された結論で

す。この罪を贖ってくださる方が確かに共に居て働いてくださるのです。私たちはその恵みに支えられて人生を共に歩むことが出来ます。自分を正しい者と思い、腹を立て、兄弟を心の中で殺している私たちを、愛し、赦し、悔い改めて招いてくださるのが私たちの神であります。

この朝、キリストは「殺すな!」と語り、「和解せよ!」と命じられました。この言葉の中に私たちが悔い改めて導く確かな神の愛と赦しが込められています。今までの自分の生き方を見直し、そして出直す。神によって造り直してもらい、新しい心を与えて戴くのです。主に立ち帰り、キリストの言葉に従って私たちは真の兄弟姉妹となり、主の恵みの中で共に歩んで参りたいと思います。

お祈りを致します。

聖なる神、今朝のキリストの言葉は私たちの最も深い所に潜む罪を思い起こさせてくださいました。主よ、どうか、自分の罪に無自覚である私たちに悔い改めの心を与えてください。新しい霊と新しい心を与えてください。私たちが主にある兄弟姉妹として愛し合い、赦し合い、一つとなって生きることが出来ますように、全ての人に和解の福音の恵みを届ける者としてください。「腹を立ててはならない」と言われたキリストの言葉を私たちが共に心に刻み付けることが出来ますように。

主の御名によって、祈ります。アーメン。

讚美歌 416「神の民は」

献金・感謝・主の祈り(三田村雅子)

主イエス・キリストの父なる神さま、聖名を崇め賛美致します。今日はこの教会に集められ礼拝を献げることが出来た喜びを感謝致します。こうやって皆で集い、この長い長い夏の暑さをどうにか潜り抜けてここに集まることが出来たその喜びを共にしたいと思います。

今日は敬老の日を控えております。私どもの教会も高齢の方をたくさん抱えて、そしてその高齢の方が様々な思いの中でこの教会を求めてくださっている、その強い思いに導かれるようにして、私たちは今、ここにあります。そしてその高齢の方々を支えて、介護に、お見舞いに、毎日を献げているその教会員もまた高齢者になっております。老々介護というのは私どもの家庭の中だけでなく、この教会全体、そして国家全体の中に広がっている問題だと思います。そういう共に重荷を共に背負いながら、その弱さを自覚しながら主にある喜びを感じ合う、そのために私どもは今ここに集っているのだというふうに思います。

今日は先生から、兄弟が互いに仲直りをするということの、重要な意味を教えてくださいました。今、世界では様々な国が、まるで兄弟のような親しい関係にある国々が、お互いに赦し合うことが出来ないで殺し合うような、そういう世界を迎えています。その状況乗り越えて、私たちが一刻も早く仲直りをする事が出来るようにお互いの心を交換し合って、そして主の心を交換することが出来るようにお互いに強め合っていきたい、その小さな願いを主イエス・キリストの前にお届けしたいと思います。

これから一週間の歩みを始めていきます。私どもに与えられた物の中のほんの小さな物をお返し致します。どうぞ教会の御用のためにお使いください。主が教えてくださいました『主の祈り』を共に祈って一週間の歩みを始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讚美歌：91「神の恵みゆたかに受けて」

派遣・祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告：①修養会案内、②次週大掃除案内など。

後奏：「み神のみ旨は常にならん」（J.パッヘルベル）